タイの若者のタイの音楽に対する認識

石　井　由　理

Thai Youth's Perception of Thai Music

ISHII Yuri

(Received September 30, 2011)

はじめに

グローバル化が進む現在、文化においても国境を越えた交流が加速し、文化のグローバル化が起きているとされる。それは、一つの強力な文化へ他の文化が収斂していくことだともいわれるし、それに対抗すべく、ローカルな文化の自己主張が強化されることだともいわれる(Ohmae cited in Tomlinson, 1999:15; Featherstone, 1997:114)。この外からの文化の流入とそれを受け入れる側のローカルな文化との関係を明らかにすべく、筆者はこれまで、日本の音楽文化と学校教育を事例とした研究を行ってきた。具体的には、明治維新以降の日本の音楽文化の近代化政策とその中で学校音楽教育が果たした役割を、学校教育政策、第二次世界大戦後の教科書掲載曲の変遷、その政策が生みだした結果である、学校音楽教育を受けた人々の日本の音楽文化に対する認識の三つの面から明らかにすることを試みてきた。

人々の日本の音楽に対する認識の研究では、異なる教育政策のもとに学校教育を受けた世代による日本の音楽文化に対する認識の違いを実証すべく、東京および山口の二つの地域の大学生および60歳以上の高齢者に対して、学習指導要領から抽出したキーワードである「日本の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」から連想する曲名および回答者自身が「好きな音楽、よく聞く音楽」の曲名を、それぞれ10曲以内で列記するという質問紙調査を実施した。この調査からは、人々の日本の音楽の認識に対する音楽教育政策の影響の可能性を支持する結果を得た。

この世代間の相違に加え、筆者は、文化のグローバル化の影響を受けたアジアの国であっても、日本のように近代化当初から国が率先して自国文化に取り入れるべき外国音楽文化を選択し、学校教育を通して国民に定着させようとした国と、特に意図的な介入をしなかった国では、その影響は異なるのではないか、よって自国音楽文化に対する人々の認識も異なるのではないかという仮説のもとに、タイ王国の大学生を主とした若者を対象として質問紙調査を実施した。本稿ではその結果を考察する。

質問紙調査の内容

タイの若者を対象とした質問紙調査は、2008年３月と2009年９月に、スラタニ・ラジャパット大学（2008年)、タマサート大学（2009年)、シルパコン大学（2009年）の3大学において、主として大学生を対象として行った。それぞれの回答者数は、スラタニ・ラジャパット大学観光学部生22人、タマサート大学日本語授業受講生101人（18-25歳の社会人を一部含む)、シル

パコン大学日本語授業受講生98人である。タマサート大学はタイを代表する大学であり、調査を行ったランシット・キャンパスはバンコク郊外に位置し、全国から学生が集まっている。シルパコン大学はバンコクに隣接するナコンパトムに位置し、スラタニ・ラジャパット大学は南部スラタニ県に位置するが、バンコクからの学生も在籍している。

質問紙調査の形式、質問内容は、日本で行った調査を踏襲した。スラタニ・ラジャパット大学の調査では筆者が前述の4つの質問を英訳した質問紙を用意し、現地の日本人教員の指示で回答してもらった。タマサート大学、シルパコン大学の調査では、事前に山口大学博士課程に在籍中のタイ人留学生によるタイ語訳を用意したうえ、現地での調査実施前にタマサート大学で日本語に堪能なタイ人教員、タイ語に堪能な日本人教員による翻訳チェックと修正を行った。シルパコン大学でもタマサート大学で用いた質問紙と同じものを使用し、タマサート大学、シルパコン大学いずれにおいても、日本語に堪能なタイ人教員の指示によって回答してもらった。回答はタイ語もしくはアルファベット、可能な場合はタイ語とアルファベットの双方で記入することとし、時間的に可能な場合はその曲の演奏者名やジャンル名も記入するように依頼した。さらに、シルパコン大学での回答のうち、「郷土の音楽」に対する回答の半数に関しては、当大学芸術学部タイ音楽科のポーンシン・アルンラット（Pongsilp Arunrat）准教授から、どのような曲であるかの解説を受けることができた。

集計と分析

回答は曲名がタイ語で書かれたものとアルファベットで書かれたものが混在していたが、日本語をアルファベット表記にする場合のように定まった規則がないため、回答者はそれぞれの判断でタイ語の音に近いアルファベットで回答していた。このため、集計にあたっては、山口大学のタイ人留学生3名によってまず回答をすべて一定のアルファベット表記に統一した。筆者が曲別の回答数を集計したのちに、タイ人留学生の協力を得て回答曲をジャンル別に分類した。タイの音楽も日本の音楽同様、様々な時代に様々な形で西洋からの影響を受けており、また、地方の民謡などは伝統的なものが近代化された形で残っている場合もあり、どこまでを伝統音楽とするか、明確な分類は難しい。より正確な分類のためにはタイ音楽の専門家に対する再度の聞き取り調査が必要であるが、本稿では暫定的な分類として、タイ人留学生が用いたジャンルに従って集計した。これらのジャンルには音楽的な特色の違いのみならず、国歌や大学の歌のように、どのような機能をもった曲であるかの違いも含まれている。集計に用いたジャンルとタイ人留学生および筆者が調べた結果による説明は以下の通りである。

1．国歌：1932年以降の民主化時代に作曲された、西洋音楽スタイルの曲。
2．現国王の作曲による曲：ほとんどがジャズである。
3．トラディショナル（Traditional）：西洋音楽の影響を受けていない、近代化以前の古い童謡、民謡、宮廷音楽など、タイの伝統的な音楽。
4．アラウジング（Arousing）：1932年の民主化以降に作曲された国民の団結を鼓舞するもので、伝統音楽と西洋音楽の特徴を合わせもつ音楽。
5．リスペクティブ（Respective）：プーミポン国王の在位期間中に作曲された伝統音楽と西洋音楽の混ざった曲。歌詞の内容は現国王への敬意を表すものが多いが、教師、母親に対する敬意を表したもの

もある。

6．クラシカル（Classical）：いわゆる伝統音楽とは異なり、1932年以降にピブーン・ソンクラーム政府の政策によって音楽の近代化をはかったウア・スントーンサナーンなどによって作曲された、伝統音楽と西洋音楽の特徴を併せ持つ曲。このタイプの音楽をクラシカルと呼ぶ傾向はマイヤーズ - モロ（Myers-Moro）（1993）にも記述されている。

7．カントリー(Country)：この呼び方に含まれるのはイサーン地方の民謡から発展したモーラムと、1960年代に「田舎者の歌」として登場したタイ版演歌ともいえるルークトゥンであるという（前川、1994)。西洋音楽の影響をうけたジャンルである。留学生はフォークおよびカラバオというグループの曲もこのジャンルに分類したが、前川によればカラバオはプア・チウィットという別のジャンルに属する。本稿ではカラバオもカントリー・ジャンルに含めることとしたが、考察ではカラバオを別にした場合についても言及する。

8．タイポップス: J －ポップスのタイ版。音楽的には西洋ポップスとほとんど区別がつかない。

9．スポーツイベントやマーチ：西洋スタイルの音楽。

10. 大学の歌：西洋スタイルの音楽。

11. 西洋音楽スタイルをもつタイの曲：上記のいずれにも当てはまらない西洋スタイルの曲。

12. インターナショナル・ポップス（International pops）：西洋ポップス。

13. J-ポップス（J-pops）：日本のポップス。

14. K-ポップス（K-pops）：韓国のポップス。

15. その他のアジアポップス。

16. ポップス以外の日本の曲。

17. 西洋クラシック。

18. お経、太鼓などのメロディーのないもの。

これらのジャンルに基づいて分類した各質問紙調査の結果を次に示す。

スラタニ・ラジャパット大学

	タイの音楽	我が国の音楽	郷土の音楽	好きな音楽
1 国歌	1	7	1	0
2 国王作曲	0	6	0	1
3 Traditional	5	9	5	0
4 Arousing	0	0	0	0
5 Respective	0	1	0	0
6 Classical	5	１７	8	1
7 Country	１１	６３	６２	6
8 タイポップス	２１９	８８	６４	８６
9 スポーツ	1	0	0	0
10 大学の歌	0	0	4	0
11 上記以外の西洋スタイル	2	9	3	0

12 International pops	0	2	0	102
13 J-pops	0	0	0	4
14 K-pops	0	0	0	3
15 アジアポップス	1	0	0	1
16 日本の曲	0	0	0	0
17 西洋クラシック	0	0	0	0
18 不明	4	4	6	2
合計	249	206	153	206

タマサート大学

	タイの音楽	我が国の音楽	郷土の音楽	好きな音楽
1 国歌	1	82	3	0
2 国王作曲	6	25	2	0
3 Traditional	36	13	117	1
4 Arousing	1	14	4	0
5 Respective	1	123	0	0
6 Classical	22	32	83	2
7 Country （カラバオ）	22（5）	14（11）	38	6（1）
8 タイポップス	509	28	2	263
9 スポーツ	0	3	3	0
10 大学の歌	9	4	9	0
11 上記以外の西洋スタイル	1	1	5	0
12 International pops	13	10	0	170
13 J-pops	1	1	0	90
14 K-pops	6	0	0	121
15 アジアポップス	0	0	0	7
16 日本の曲	0	0	0	0
17 西洋クラシック	0	0	3	2
18 不明	3	2	2	5
合計	631	352	271	667

シルパコン大学

	タイの音楽	我が国の音楽	郷土の音楽	好きな音楽
1 国歌	7	70	2	0
2 国王作曲	0	12	0	0
3 Traditional(新旧不明の民謡)	13	7	82（20）	1
4 Arousing	0	15	5	0
5 Respective	0	95	0	0
6 Classical	26	56	52	0
7 Country （カラバオ）	33	15（5）	68（2）	1
8 タイポップス	572	2	2	259

9 スポーツ	0	4	2	0
10 大学の歌	0	0	0	0
11 上記以外の西洋スタイル	0	8	8	0
12 International pops	5	0	0	１９０
13 J-pops	3	0	0	１９７
14 K-pops	1	0	0	１００
15 アジアポップス	1	0	0	5
16 日本の曲	0	2	2	0
17 西洋クラシック	0	1	0	4
18 その他（メロディーなし）	0	1	4	0
19 不明	0	0	4	6
合計	６６１	２８８	２３１	７６３

これらの結果を円グラフに表し、それぞれの質問項目ごとに並べたのが次に示す図１－１２である。

「タイの音楽」に対する回答の比率

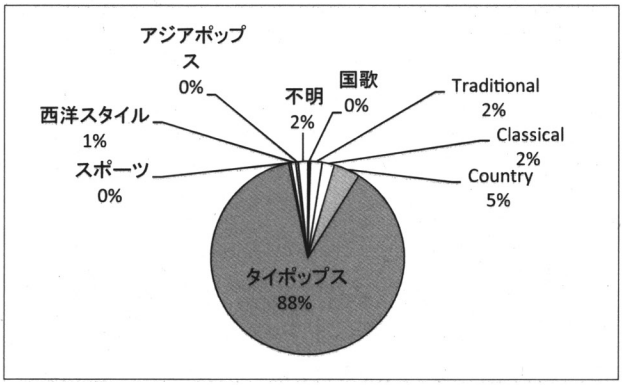

図１　スラタニラジャパット大学

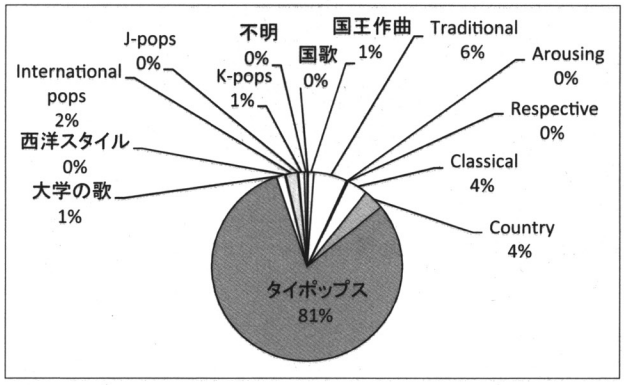

図２　タマサート大学

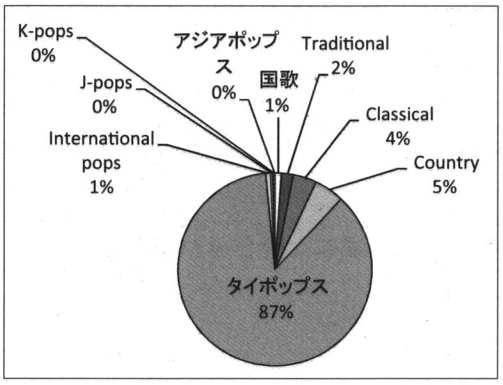

図３　シルパコン大学

「我が国の音楽」に対する回答の比率

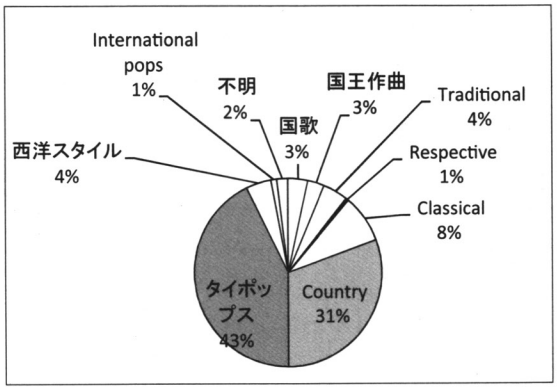

図４　スラタニ・ラジャパット大学

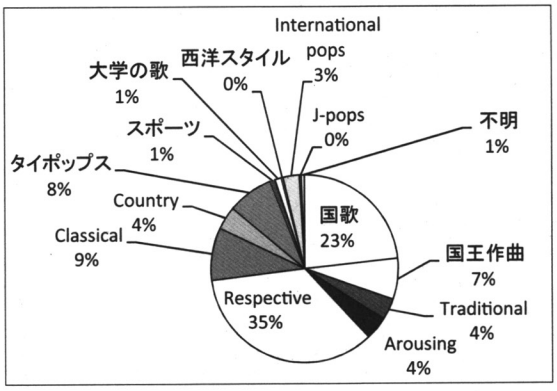

図５　タマサート大学

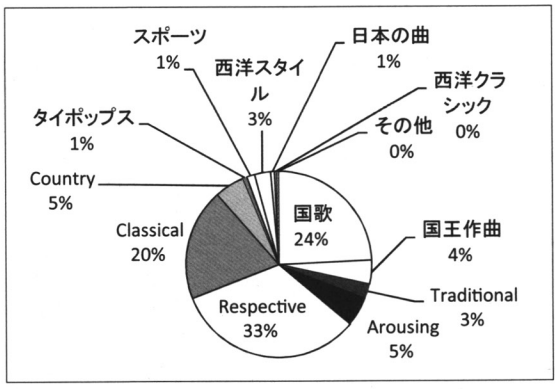

図６　シルパコン大学

「郷土の音楽」に対する回答の比率

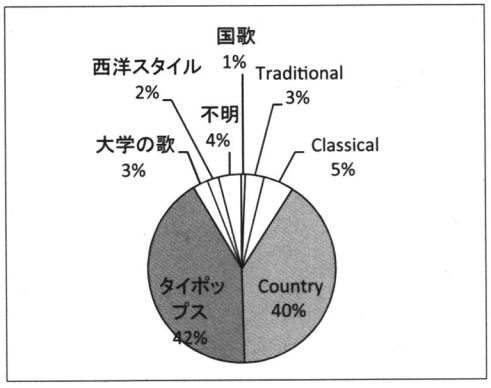

図７　スラタニ・ラジャパット大学

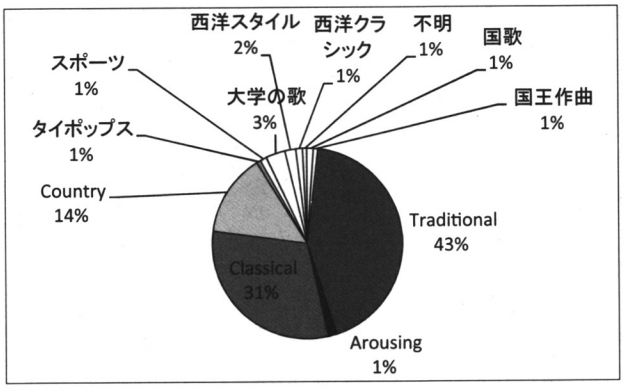

図８　タマサート大学

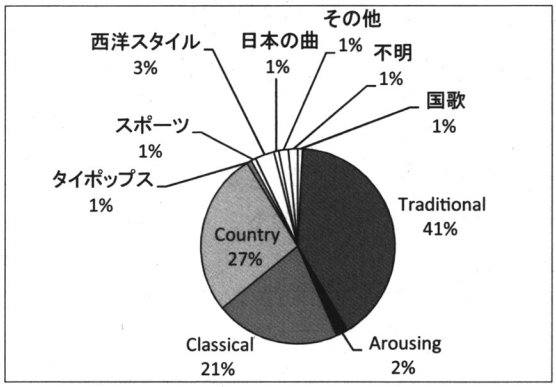

図９　シルパコン大学

「好きな音楽、よく聞く音楽」に対する回答の比率

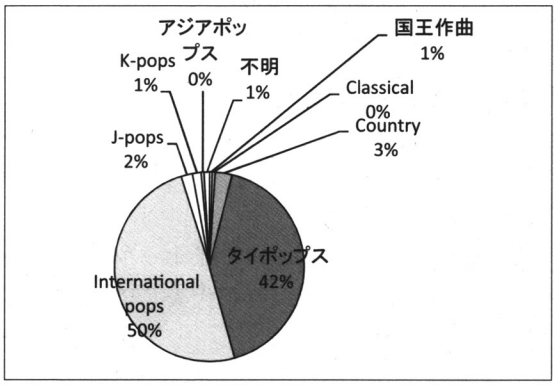

図10　スラタニ・ラジャパット大学

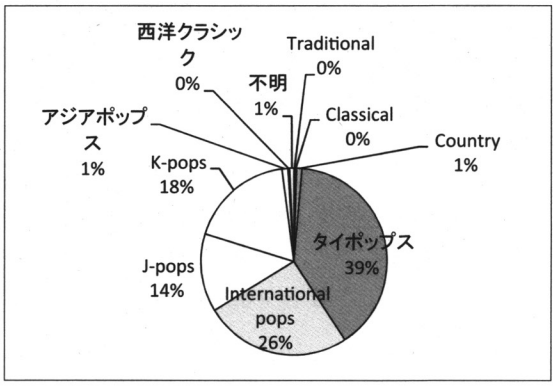

図11　タマサート大学

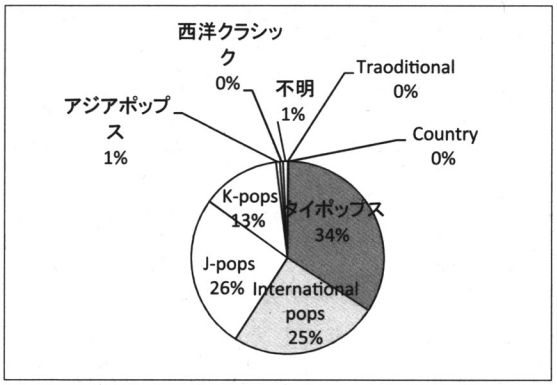

図12　シルパコン大学

考察

「タイの音楽」

「タイの音楽」に関しては、３つの大学で得た回答の割合はいずれもよく似たものとなった。特徴は、タイポップスが圧倒的に多いということであり、どの大学においても80パーセントを

超え、スラタニ・ラジャパットとシルパコンにおいては、90パーセント近くにのぼった。このほかに、カントリーが4－5パーセント、クラシカルが2－4パーセントという割合も3大学共通である。この2つのジャンルもタイの伝統音楽ではなく、1932年の近代化以降に西洋音楽の要素を取り入れて書かれたものであること考えると、タイの若者が「タイの音楽」に対して持っているイメージは、圧倒的に西洋音楽スタイルの曲だということになる。

回答は特定の曲に極端に偏ることはなく、もっとも多い回答数の曲でも、スラタニ・ラジャパット大学では「dai yin mai」の7名（全回答数249のうち）、タマサート大学では「yood」の16名（全回答数631のうち）、シルパコン大学でも「yood」の11名（全回答数661のうち）であった。これらはいずれもタイポップスである。タイポップスの回答はその年に流行っている曲を答える傾向があるため、2008年2月に調査したスラタニ・ラジャパットの回答のみ他の2大学とは違う曲名が上位を占めているが、タマサート、シルパコンでは全てのジャンルを含んだ回答全体の上位10曲中、「yood」以外にも、「yoo bum rung」（各10名）、「kwam kid」（タマサート7名、シルパコン10名）、「jum tham mai」（各7名）が共通であった。ある年に限れば「タイの音楽」としてある程度の共通認識が得られるタイポップスの曲があるとういことである。これに対し、全体に対する割合が2パーセント（スラタニ・ラジャパット）、6パーセント（タマサート）、2パーセント（シルパコン）と非常に低かったトラディショナルのジャンルの曲である「chang」が、3大学すべてで全回答中の上位10曲中に入っている（スラタニ・ラジャパット4、タマサート8、シルパコン6）。これは流行に左右されない古い童謡であり、継続的に「タイの音楽」を代表する定番の曲であるといえよう。

以上をまとめると、若者にとっての「タイの音楽」はジャンルとしてはタイポップスが代表するが、曲としてはトラディショナル・ジャンルである童謡の「chang」が代表していることになる。

「我が国の音楽」

タマサートとシルパコンの結果は比較的似ているが、スラタニ・ラジャパットのみ大きく異なる結果が出た。これは質問項目の翻訳が異なったために起きた違いである可能性が高い。前述のようにスラタニ・ラジャパットでは英語訳に、他の2校ではタイ語訳にした質問紙を用いたが、回答の傾向から、タイ語訳の「我が国」の方が「国家」に近いニュアンスであったと考えられる。また、スラタニ・ラジャパットの「我が国の音楽」に対する回答は、後述する「郷土の音楽」に対する回答と似ており、英語の country を故郷の意味で解釈した回答者が多かったものと思われる。

スラタニ・ラジャパットの回答で最も多い割合はやはりタイポップスであるが、「タイの音楽」と比較すると半分に減少している。それに代わって割合を大きくしたのがカントリーである。西洋スタイルをもつ音楽であることに変わりはないが、タイポップスが都会派の歌謡曲の流れをくむのに対し、カントリーに分類したモーラム、ルークトウン、フォークなどは、農村派の大衆歌謡曲である。北原（2006：625）によれば、ルークトウンとは、「東北タイの民謡のメロディーをとりいれながらも、全国版の商業的『国民文化』となった歌謡曲の一ジャンル」であり、「都会へ出た地方出身者のアイデンティティーのよりどころであり、特定地方にしか通じない農村文化に代わって、全国共通の農村文化・社会のシンボルになった」音楽である。スラタニ・ラジャパットのカントリーに対する回答63のうち、カラバオ（3）を含んだプア・チウィットは5にとどまり、これらを除外してもカントリーの割合にあまり影響はない。タマ

サートとシルパコンの回答にもカントリーはあるが、タマサートでは14名の回答のうち11、シルパコンでは22名のうち５が政治問題や環境問題に対する抗議の歌を歌う、カラバオという特定グループの曲を答えたものであった。よってタマサートの回答の中のカントリーは、カラバオを別ジャンルとみなす場合は大幅に減少する。

タマサートとシルパコンの回答で最も多いのは、現国王や教師、母親などへの敬意を表したリスペクティブのジャンルの曲であるが、ジャンルそのものが代表的とみなされているというよりは、特定の２曲「san sern pra baramee」と「sadudee maharacha」に回答が偏ったため、大きな割合を占めることになった。回答数は「san sern pra baramee」がタマサート74名（リスペクティブ・ジャンルの回答123のうち）、シルパコン52名（同95のうち）、「sadudee maharacha」がタマサート26名、シルパコン26名である。これらはいずれも現国王に対する敬意を表した曲である。

タマサートとシルパコンで次に大きな割合を占めたのはいずれも国歌で、全体の約４分の１を占める。これも当然ながら特定の１曲である。３番目に大きな割合を占めたジャンルはクラシカルであるが、ここでも特定の曲に回答が偏っている。日本の盆踊りのような音楽であるロイクラトーン祭りの曲「loy kra thong」（タマサート12、シルパコン24）、母の日の歌である「ka num nom」（タマサート７、シルパコン14）がその曲である。このうち「loy kra thong」はスラタニ・ラジャパットの調査でも最も多くの回答（12名）を集めた。野津（2005）のタイの学校でのフィールドワークの記録によれば、ロイクラトーン祭りや母の日は学校の授業で扱われる単元であり、タイ人留学生2名の話では「loy kra thong」「ka num non」は、いすれも学校で習う曲のようである。

以上をまとめると、「タイの音楽」がタイポップスというジャンルのイメージであるのとは異なり、「我が国の音楽」で連想するのは、特定の数曲であるということである。この数曲がどのジャンルの曲であるかによって、「我が国の音楽」に対する回答のジャンル別の割合が決まったことになる。この傾向に学校教育がどの程度関係しているのかは、今後の研究で明らかにしたい。

「郷土の音楽」

この項目に関しても、スラタニ・ラジャパットの回答のみ、他の２校とは大きく異なる結果となった。スラタニの回答は２番目の質問項目の「我が国の音楽」とほぼ同様であり、これは前述したように「我が国」の英訳である country を故郷と解釈したため、「郷土の音楽」と重複した回答となったものと考えられる。わずかな違いは国王作曲の曲とクラシカル・ジャンルの曲が減少した分、カントリー・ジャンルの曲の割合が40パーセントにまで増えたことである。「郷土の音楽」に対しては、「我が国の音楽」の回答のうちカントリーを国全体と解釈して答えたものが減り、農村文化のイメージをもつ回答が増えたことになる。他２校においてトラディショナル・ジャンルの曲が多いのに対し、スラタニ・ラジャパットではタイポップスが多い理由は不明であるが、翻訳もしくは指示をした教員の使ったことばの違いによる影響は否定できない。

タマサートとシルパコンの結果はこの項目においてもよく似ている。最も割合の大きいジャンルはトラディショナルであり、両校とも40パーセントを超える。ただし、この中には伝統音楽が西洋音楽の影響を取り入れた形に変化したものも含まれると考えられ、厳密にこの回答全てが伝統音楽であるとは言い難い。マイヤーズ-モロ（1993:9）によれば、バンコクを拠点に

活動する東北タイ出身のミュージシャンは、厳密に伝統的な民族音楽も演奏すれば、ルークトウンも演奏する。コンサートでは伝統的民謡であるモーラムの演奏の際に、伝統楽器と共にギターやドラムなどの西洋楽器が使われることもあるという。

トラディショナルの回答の中で最も数が多かったのが「lao doung duen」で、タマサート36名、シルパコン16名である。これはシルパコン大学の伝統音楽の専門科目の授業でも演奏されていた正統派の伝統音楽である。タマサート大学ではこの他に「kamen sai yok」(18名)、前述の童謡「chang」(9名)が上位に入った。シルパコン大学では「lao doung duen」の他に上位に入ったトラディショナルの曲は「chang」(7名)であった。

タマサート大学では2番目(のべ83曲、全体の31パーセント)、シルパコン大学では3番目(のべ52曲、全体の21パーセント)に大きな割合を占めたのはクラシカル・ジャンルであったが、いずれの大学の回答においても、特定の2曲「loy kra thong」(タマサート38名、シルパコン31名)、「kang cow kin gluay」(タマサート21名、シルパコン8名)に集中した。このうち「loy kra thong」は、スラタニ・ラジャパット、タマサート、シルパコンの3大学で「我が国の音楽」「郷土の音楽」の上位に入っており(シルパコンでは「タイの音楽」でも入っている)、全国共通の故郷を代表する曲となっている。

タマサート大学で3番目、シルパコン大学では2番目に大きな割合だったジャンルはカントリーである。この点に関してはすでに「我が国の音楽」のところで説明をしているので省略する。

「好きな音楽・よく聞く音楽」

この項目に関しては、「タイの音楽」同様に3校ともよく似た結果となった。いずれの回答においても95パーセント以上がポップスである。このうちタイポップスが占める割合をみると、スラタニ・ラジャパットで42パーセント、タマサートで39パーセント、シルパコンで34パーセントと、いずれも半数に達していない。残りの半数以上は外国のポップスが占めている。スラタニ・ラジャパットでは西洋ポップスが50パーセント、日本と韓国のポップスがそれぞれ2パーセントと1パーセントである。タマサートとシルパコンでは回答者が日本語授業の受講者というバイアスがかかっているため、外国ポップスの中でも日本と韓国のポップスが占める割合が、スラタニ・ラジャパットと比べて大きい。タマサートでは外国ポップス59パーセントの内訳は、西洋ポップス26パーセント、日本ポップス14パーセント、韓国ポップス18パーセント、その他のアジアポップス1パーセントである。シルパコンは65パーセントのうち、25パーセントが西洋ポップス、26パーセントが日本ポップス、13パーセントが韓国ポップス、1パーセントがその他のアジアポップスである。

のべ曲数がそれぞれ206曲(スラタニ・ラジャパット)、667曲(タマサート)、763曲(シルパコン)と多いことを考慮すれば、特定の曲への回答の偏りはあまりないといえる。それぞれの大学で最も多かった曲をあげると、スラタニ・ラジャパットは「play girl」(タイポップス)が5名、タマサート大学は「yood」(タイポップス)が11名、シルパコン大学では「Come back to me」(日本ポップス)と「yoo bam rung」(タイポップス)が同数で9名であった。

おわりに

本稿では、これまでに筆者が実施し分析してきたタイの若者を対象とした質問紙調査の結果をまとめた。その結果、「タイの音楽」に対してはタイポップスの回答が大多数をしめ、「好きな音楽・よく聞く音楽」においては外国のポップスが過半数を、ついでそれよりもやや下回る割合でタイポップスが占めていた。若者の日常生活の中にあるのは国内外を問わず、西洋音楽スタイルのポップスであり、彼らにとってタイの音楽とは、主としてその中のタイポップスを意味する。しかし、タイポップスはもはや音だけ聞いた限りでは欧米のポップスと区別がつかないほど西洋化しており（Maryprasith, 1999)、音楽的には西洋ポップスと同様とみなしてよいようである。

「我が国の音楽」「郷土の音楽」に関しては、翻訳のためにスラタニ・ラジャパットの回答のみ他とは異なる結果となったが、タマサート、シルパコンにおいては「我が国の音楽」には特定のリスペクティブ・ジャンルの曲と国歌、「郷土の音楽」に対しては比較的多数が回答する曲も含めたトラディショナル・ジャンルの曲、全国共通の郷土の音楽となっている特定のクラシカル・ジャンルの曲を回答する傾向が見られ、これらの曲と学校教育との関連性の可能性も示された。「郷土の音楽」およびスラタニ・ラジャパットの「我が国の音楽」にみられたカントリー・ジャンルの回答に関しては、タイ独特の文化的・社会的背景が存在することも文献調査から明らかになった。これらのうち、リスペクティブ、クラシカル、カントリーはいずれも西洋音楽スタイルを取り入れたジャンルであり、残るトラディショナルにおいても西洋化が進んでいる。総合的に見ると、タイの若者の音楽文化は、彼らがタイの音楽と考えているものも含めて、かなり西洋化されているといえる。

今後の課題としては、まず今回暫定的に用いた分類のためのジャンルを専門家の眼から確認していくことがある。また、若者の回答に対する学校教育の影響を知るために、タイの文化政策と音楽教育についての調査を進める必要がある。これらの調査を経たうえで、日本とタイの若者の自国音楽認識と国家の学校教育を通した音楽文化への介入の関連を比較し、文化のグローバル化に対する国家によるローカル文化の自己主張の成果を検証することが最終的な目標である。

参考文献

Featherstone, Mike（1997）*Undoing Culture: Globalisation, postmodernism and identity*, London: Sage.

北原淳（2006）「解題」パースック・ポンパイチット、クリス・ベーカー（著）北原淳、野崎明（監訳）日タイセミナー（訳）『タイ国—近現代の経済と政治』刀水書房、621－627.

前川健一（1994）『まとわりつくタイの音楽』めこん.

Maryprasith, Primrose（1999）*The Effects of Globalization on the Status of Music in Thai Society*, Unpublished PhD thesis. London: Institute of Education, University of London.

Myers-Moro, Pamela（1993）*Thai Music and Musicians in Contemporary Bangkok*, Centers for South and Southeast Asia Studies, University of California at Berkeley.

野津隆志（2005）『国民の形成』明石書店.

ポンパイチット, パースック、ベーカー, クリス（2006）北原淳、野崎明（監訳）日タイセミナー（訳）『タイ国—近現代の経済と政治』刀水書房.

Tomlinson, John (1999) *Globalisation and Culture*, Cambridge: Polity Press.

＊本稿は平成21年度－23年度の科学研究費助成（基盤研究(C)一般　21530942）を受けて実施した研究成果の一部をまとめたものである。